

弥生時代から卑弥呼の邪馬台国・大和初期王権へ 国家形成の時代を動かした「鉄」

無手勝流で 鉄をキーワードに 弥生から邪馬台国・大和王権への変遷を整理

2010 年秋 関西各地で開催された博物館特別展とそのシンポジウム & 連続講演会 聴講まとめ

By Mutsu Nakanishi

『魏志』倭人伝によると、3世紀前半の日本列島には、卑弥呼の治める邪馬台国を盟主とする29ヶ国からなる倭国連合が形成されていたことが知られる。一方最近の考古学的な研究成果からは、3世紀の中葉ないし中葉すぎには、近畿中央部の「やまと」の勢力を中心に、各地の首長たちの政治連合にほかならない初期ヤマト政権が成立していたと考えられている。私は、こうした初期の倭国連合の形成には、鉄資源の確保という問題が関わっていたと考えている。ここでは「鉄」をキーワードに、倭国連合の形成の契機、さらには邪馬台国連合から初期ヤマト政権への展開過程をあとづけてみることにしたい。

近つ飛鳥博物館 h22年度秋季特別講演会

「倭国連合の形成と鉄」近つ飛鳥博物館館長 白石太一郎氏 講演資料 巻頭より

弥生の定住農耕文化の始まりとともに、紀元前2世紀頃に鉄が伝来し、その後 時代とともに、大陸・朝鮮半島から 鉄製品や鉄素材を輸入しつつ、それらを鍛冶加工して数々の農耕具・武器など、石器を置き換えつつ鉄器の時代を作り上げた。

そして、同時に この時期 定住農耕の社会の展開は集団化をますます発展させ、地域集団から地域首長国 そして国 へと社会を高度に発展させ、やがて 卑弥呼・邪馬台国から 大和王権による日本統一へと進んでいった。

弥生時代の水田稲作と鉄器は切り離せないものとして、弥生時代に日本全体が鉄器時代に入ったとみられがちであるが、鉄器の利用・普及には日本各地で大きな差があり、弥生時代の後期を迎えても 北部九州を除き、主要利器は石器であり、実用鉄器が大きく花開くのは古墳時代に入ってからだという。

愛媛大学村上恭通氏によれば、各地に首長国が誕生していた弥生後期2世紀～3世紀初めになっても

「西から東へ伝わってきた鉄の最前線は北陸・丹後・播磨・阿波を結ぶ線ではないか

また、鉄に対する温度差が日本各地であったようだ」という。

畿内の中心 大和での鉄の蓄積は小さく、大陸／朝鮮半島に近い北部九州首長国が安定な鉄器入手経路を支配し、山陰・丹後・北陸の日本海沿岸もまた独自の鉄の入手路を確保していた様であるが、瀬戸内沿岸や畿内・東国の諸国は鉄の入手を北部九州に頼らざるを得ず、思うように利用できる鉄素材・鉄製品を手に入れられなかったと考えられる。

卑弥呼・邪馬台国が登場する弥生の終末期 3世紀半ば 国内の鉄の事情が一変する。

北部九州に偏在していた鉄器・鉄器加工技術の中心が畿内に移り、北部九州の鉄器製造は衰退するのである。

その卑弥呼が登場する前の時代には 地域集団そして各地の国々での争いが多発し、特に瀬戸内海に沿う地方では 鍛冶工房など生産工房を持つ高地性集落とその麓周辺にも数多くの集落ができる。ところが それらの集落は 卑弥呼が登場するすぐ前にほとんどが次の時代につながらず消滅する。 摂津・淡路・吉備そして九州でも同じという。

これらの変化はいったい何を意味するのか 卑弥呼登場と関係するのか・・・興味深いところである。

また、弥生時代 鉄器が中国・朝鮮半島から鉄器が入って来るが、実用鉄器を見ると 農耕具など多彩な実用鉄器が使われたのは豊富な鉄素材を入手できる北部九州などに限られ、それ以外ではほとんどが、まだ小型の工具などを除いてはほとんどが石器である。 畿内でも弥生時代後期にならないと実用鉄器はなかなか普及してこない。

この時代でも 畿内での鉄器出土数は限られているが、大幅に石器製造数が激減し、なおかつ 鉄器が組み込まれ田と考えられる柄が多数出土し、鉄器の需要がこの時代大きく高まっていったことがうかがえる。

弥生時代の鉄の流れを見ると

西から東へ 鉄器の量・質・大きさとともに鉄製品の加工技術の稚拙さや適用鉄器の拡がりなどが、西へ行くほど退化している傾向がみられ、弥生時代後期へと時代が下るにつれ、鉄器加工技術が退化の傾向が地域によって現れている。

この理由は 獣文に考証されていないが、鉄素材の供給を先進地大陸・朝鮮半島に最も近い北部九州に握られ、鉄素材や鉄器の量・質 そして その加工技術も北部九州に握られていた表れと考えられよう。

この大陸・朝鮮半島の鉄を巡って、大陸・朝鮮半島の先進文化・技術とともに鉄素材・鉄器の量・質とも潤沢に入手したい瀬戸内・畿内の首長国は支配権の奪取がきわめて大きな課題であったに違いない。

何がきっかけかはわからないが、鉄の安定確保を巡って北部九州と西日本諸国の間で、争いが頻発したと想像される。

1世紀後半から3世紀初頭にかけて、特に必要に迫られていた瀬戸内・畿内の諸国は連合して、北部九州と争い 北部九州から鉄の支配権を奪い取っていった。これが 中国魏志倭人伝に書かれた倭国の大乱であろうか??。

瀬戸内海岸沿いの首長国には 鉄鍛冶工房など生産工房とともに戦に備えた数多くの高地性集落の出現し、「鉄の安定供給」を目的とした瀬戸内・畿内首長国連合である女王卑弥呼の邪馬台国連合が北部九州から鉄の供給権を奪取する。

その後、大和を中心とした連合は鉄の支配権を武器に 自立していた出雲・丹後・東海そして東国諸国を連合の中に組み入れ、前方後円墳を連合の象徴として初期大和王権が成立してゆく。

この時代変遷をもたらしたのは「朝鮮半島の鉄」の入手がキーワード

これが、どうも弥生時代から 伊都国など北部九州勢力の時代を経て 卑弥呼の邪馬台国・大和初期王権の統一国家形成への時代変遷の基本的な流れのようだ。

私をふくめて素人では なんだか誰でも知っているようで、個々にはみんなばらばらで、なかなか 自信持って話せない 古代日本の国家形成のアプローチ。 これで 人の話も以前より理解できそうである。

また、弥生時代 鉄器が中国・朝鮮半島から鉄器が入って来るが、実用鉄器を見ると 農耕具など多彩な実用鉄器が使われたのは豊富な鉄素材を入手できる北部九州などに限られ、それ以外ではほとんどが、まだ小型の工具などを除いてはほとんどが石器である。 畿内でも弥生時代後期にならないと実用鉄器はなかなか普及してこない。でも畿内での鉄器出土数は限られているが、大幅に石器製造数が激減し、なおかつ 鉄器が組み込まれたと考えられる柄が多数出土し、鉄器の需要がこの時代大きく高まっていったことがうかがえる。

【補足】

大陸・朝鮮半島と自立して交流し、鉄のルートを有し、それぞれ独自の文化を育てていた出雲などの日本海諸国が、最初から邪馬台国連合に加わっていたのか、後で加わったのかはよく判らない。

- また、北部九州から大和への勢力移行については 記紀が記す北部九州から大和への東遷説も根強いが、人の交流移動についてまわる土器の流入移動から見ると、この弥生終末期・古墳前期 北部九州への畿内土器の流入が数多くみられるのに対し、北部九州の土器の畿内への流入が小さいといわれ、人の移動は他の地域より少ない。明確な見解があるわけではないが、東遷の可能性は小さいとの見方が根強い根拠の一つと言われる。
- さらに 瀬戸内海を見晴らす瀬戸内沿岸の高地性集落をみると個々の集落からは全方位を見渡せないが、周辺の高地性集落をつなぐと瀬戸内海全体が監視できること また これらの集落に連携する地域の土器が出土することから、瀬戸内海沿岸の讃岐・阿波・吉備・播磨の諸国の連携が読み取れるという。
- なお、この時代 畿内への主要 鉄・文化の交流ルートは瀬戸内沿岸から播磨・摂津へのルートが主であり、讃岐から阿波→紀伊を通ってのルートは想定しにくいという。

以上 2010年秋 関西で開催された「鉄から見た弥生から大和への時代変遷」に関するいくつかのシンポ・講演会を聴講して得たメモ・感想より整理しましたが、整理のベースに 白石太一郎氏(近つ飛鳥博物館館長)の講演「倭国連合の形成と鉄」を置きましたので、随所に白石説に引っ張られていると思われるので、この点 ご注意ください。

by Mutsu Nakanishi